

『ロンドン成り行き半生記 自費留学生から弁護士になるまで』

宮嶋満江 著 トランスワールドジャパン 1,260 円 (税込)

若々しい息吹みなぎる著者からの
暖かいメッセージ

会員 中村 秀一 (45 期)



大学卒業後中学校教師を経て、自費留学で渡英し、以来、イギリスで、銀行、証券会社での金融経験を経て、法廷弁護士の資格を取得する異色の経歴の持主による著作。帯封には「自分の人生を切り拓きたいと願うすべての人に贈る！ 25歳で教師の職を捨て渡英。50歳で弁護士資格を取得した著者が綴る海外に夢を託す、新しいバイブル！」とある。

著者とは、2000年に日弁連人権と報道に関する調査研究委員会でイギリスの報道に関して現地視察の際に通訳をお願いしたのがきっかけで知り合った。

本作は、著者が25歳の時に日本からイギリスに向かう1か月の旅の思い出を振り返りながら始まる。そして留学先にイギリスを選んだ理由に触れた後、イギリスで働きながら学校に行くため、オペア制度を利用したことを紹介している。オペア制度とは、著者によれば「家族の一員として、子供の面倒や軽い家事を手伝いながら生きた英語を習得できる、語学学校に行く時間は確保され、小額のお小遣いまでもらえるという夢のような制度」。ハッピーなケースばかりではないそうだが、著者には貴重な経験となり、今でもその家族と交流を続けているとのこと。私は本作を読むまでオペア制度の存在やオペア制度の功罪をめぐって様々な論議がなされていることを知らなかったので興味深かった。

本作は引き続き、著者が留学期間に関して親と1年限りと約束したものの、イギリスで就職することを決意し、イギリスの東京銀行に就職して銀行員協会設定の試験にパスして銀行員協会の資格を得たこと、その後、野村証券に転職し、企業金融課での充実した仕事ぶりが回顧される形で展開されていく。そして法務課に異

動になったことがきっかけで、イギリスでの弁護士資格に挑戦することを思い立ち、野村証券を退職して再び学生生活に戻り、法学位に代わる弁護士試験受験資格を取得し、法廷弁護士試験に挑戦していく。周知のように、イギリスでは、事務弁護士（ソリシター）と法廷弁護士（バリスター）に分けられ、弁護士になろうとする者は最初からどちらかを選択しなければならない。著者は法廷弁護士コースを選択し、1年間で法廷弁護士試験の8科目をマスターし、翌年5月の2週間にわたる試験で全科目を一度にパスしなければならないという過酷な試験に挑戦。試験を受けた1997年5月に満50歳になろうとしていたというから、その精神力たるや、並大抵ではない。ちなみに、2000年に制度が変わるまでは、法廷弁護士試験は2種類に分かれていて、法廷で弁護する権利を放棄して理論のみの試験を受けるコースと、法廷での弁護が大きな割合を占めるコースがあり、それが2000年の制度改革で後者のコースのみになったとのこと。

本作後半では、弁護士資格を取った後の仕事ぶりが紹介されている。三菱UFJセキュリティーズ・インターナショナルに就職し、金融と法律の両方の資格を活かした仕事ぶりや若い弁護士への指導に言及した後、2008年に退職。その後、今も人生最後の章の設計に着手しようとされており、若々しい息吹がみなぎる著者の姿勢が彷彿とさせられる。最終章では「宇宙、太陽系、地球、そして生きとし生けるもの」と題して読者に対して暖かいメッセージを発している。読み終えた後、夢を忘れず、ひたむきに挑戦し続ける姿に清々しい清涼感が残るのは、私一人ではないはずだ。